

研究テーマ：ライティング授業で英文を書こうとする意欲を高める工夫

所属 高知西高等学校

氏名 北原 博文

R G S H 5

1. 研究の背景

3 年普通科（男子 15 名、女子 24 名）の 1 クラスで、リーディングとライティングを担当している。前者に比べ、ライティングの方は不得意とする生徒が多く、中でも和文英訳が苦手である。

2. リサーチクエスト

ライティングの授業で、生徒が自分で英文を書こうとする意欲を高めるためにはどうしたらいいか。

（1）ライティングの学習が終了する前期末（9 月末）までに、クラス全員の生徒が 50 語程度のまとまった英文を書けるようにする。

（2）前期末テストで和文英訳の問題の正答率を 60 パーセントに向上させる。

3. 予備調査

予備調査 1 授業観察の結果

ライティングの時間では、テキスト音読や Q & A などのインターアクションが少なく、しかも構文や語法の説明と演習、その答え合わせの繰り返しになりがちで、生徒にとっても単調である。

板書した解答例はノートにとるが、自分から進んで英作文の問題に向き合い、それと格闘してみようとする生徒が少ない。辞書を持たない生徒の中には、英作文の作業のきっかけすらつかめない場合もある。

教科書の中に出てくる作文問題そのものが生徒にとって必ずしも興味深いものばかりであるとは限らない。

予備調査 2 英語力を示すデータ

前期中間テスト（別紙）

予備調査 3 アンケート、授業評価の結果

「ライティング授業に関するアンケート調査」NO.1, NO.2 の結果

予備調査 4 生徒の自己評価

予備調査 5 文献研究

「アクション・リサーチのすすめ」佐野 正之 編著 大修館

4. 仮説の設定

（1）仮説

仮説 1 英作文のテーマが生徒の日常生活に見られる身近な事柄についてならまとまった英文が書けるのではなかろうか。

仮説 2 毎回一人ひとりの英文の添削ができれば、もっと書こうとする意欲が出てくるのではないか。

仮説 3 まとまった英文を書く意欲が高まり少しでも自信がつけば、テストの和文英訳問題の正答率を上げることができるのではないだろうか。

5. 計画の実践

毎時間授業はじめに、身近なテーマで50語程度の英文を書かせる。(10分)
それを添削し、コメントをつけて返却する。前期末までに7回実施。

テーマ例：「お祭り」、「Our Sports Day」、「Our Homeroom Teacher」、「The Gossip that I Heard Lately」、「If I Were a Millionaire」 など

6. 実践の結果

50語前後のまとまった英文を曲がりなりにも仕上げて提出した生徒は、毎回一様ではないが、平均でほぼ90パーセントであった。

別紙事後アンケート調査結果によれば、この10分間ライティング練習について、「自信がついた」または「以前よりも英語で書いてみようという気になった」と回答した生徒は全体の64, 9パーセントを占め、否定的な意見16, 2パーセントを上回った。

前期中間テストと前期末テストとの結果は次の通りである。

	中間テスト	期末テスト
英作文問題正答率	41, 0%	47, 5%
テスト全体の平均点	61.3点	55.5点

7. 結果の検証

仮説1 教科書の形式的な日本語をただ英語訳することよりも、地域や学校などの身近なトピックの方が生徒には好評だった。自らの体験や、それに基づく感想や意見なら英文で自己表現してみようという意欲が高まったようだ。

仮説2 生徒が提出した英文はすべて一人ずつ添削しコメントを書き添えてみた。同一の日本語に対しても生徒の書く文はまちまちである。これまで生徒一人に解答を板書させそれを基に解答例を作っていたの比べ、多様な解答例が示せるし、何より生徒のオリジナリティーが尊重できる。生徒は、拙なくとも自分の英文が添削されコメントされることによって、また英文を書いてみようという気持ちになるのかもしれない。

仮説3 正答率では目標値に遠く及ばず、わずか6.5ポイントの上昇に終わった。しかし、問題そのものが単純比較できないし、今後何回か回数を重ねることで生徒の中に「書こうとする意欲」を引き出していくことができるように思われる。

8. 成果と今後の課題

短いパラグラフであっても自ら英文を書いてみようとするためにはどうしたらいいか、という素朴な視点で単純なリサーチを行ってみた。その中で、作文のテーマの設定にひと工夫をしたり時間をかけて添削を行うことで、「ライテ」に対する生徒の態度に変化が出てきたように思える。幾分か英作文アレルギーを緩和し、「少しは英作文が自力で書けるようになった」と思う生徒を増やすことができたのではないかと感じている。

しかし、佐野 正之先生の言われる二つの「書く」活動 ----writing for language learning と writing for communication ---のうち、今回私が取り組もうとしたのは後者の方であって、前者の方ではなかった。この二つのライティング活動を授業の中でどう重ね合わせていったらいいか、そのための具体的な目標をどこに設定していくか、などが次のリサーチ課題となっている。